

東京講演会を開催

奈良文化財研究所では、これまでに多くの成果をあげてきましたが、その中でも重要な業績の一つが、発掘した古代の遺跡や遺構がいつのものなのかを明らかにするための編年研究です。

奈文研は、60年余りにわたって平城京・藤原京という都城や飛鳥の遺跡を中心に精緻な発掘調査を継続しておこなっています。歴代の研究員は、それらの調査で出土した膨大な土器や瓦の特徴の変化を詳細に検討するとともに、木簡等の文字資料や銭貨を検討し、さらに文献記録も照合することで、年代を測るための「ものさし」を、より精緻なものに仕上げることに大きな努力を払ってきました。そして、今では、奈文研の作った「ものさし」は、全国各地の古代の遺跡や遺構の年代を決定するために活用されています。

また、このようにオーソドックスな考古学的手法で「ものさし」を作り上げるいっぽうで、木の年輪幅がそれぞれの年の気候や環境に左右されることに着目した、年輪年代法という自然科学的な年代決定法をわが国で初めて導入し、従来の弥生時代の年代観を大きく書き換える等の画期的な成果を上げています。

今回の特別講演会では、奈文研が古代の遺跡や遺物の年代を決定するために、これまでにどのような研究をしてきたのか、研究の最前線では、今、どのような視点でどのような問題を解決しようとしているのか、そして、土器・瓦・木簡等の研究が互いにどのように補完しあって成果を上げているのかを、6人の研究員が奈文研の研究の舞台裏も交えて話しました。

当日の来場者は480人で、メモを取りながら熱心に聴き入る方も多く見受けられました。

(連携推進課長 田中 康成)



講演会風景(東京会場)